

令和2年度 第1階 上京区まちづくり円卓会議（はぐくみ・継承部会） 摘録

日 時： 令和2年8月5日（水） 午後3時から午後5時まで

場 所： 上京区総合庁舎4階 大会議室1・2

出席者： 【学識者等】

新川議長，中井委員，山本副議長

【円卓会議委員】

井筒委員，井澤委員，福井委員，大塚委員，中野委員

※ 欠席：高田委員，和多田委員

【区役所】

林区長，三谷室長，松本部長，丸山室長，高橋課長，石井係長，西川担当，松井まちアド，
加藤まちアド

1 議題

（1） コロナ禍による価値観等の変化について

委員 コロナ禍で感じていることとして、震災時と違ってどうしたら良いのかが見えてこないジレンマ。距離を取りながら交流することの難しさを感じている。きちんと距離をとったおしゃべりの場があってもいいと思っている。

委員 新型コロナウイルス感染症により、地域行事は中止も含めた判断に迫られている。

町内等では、「中止になって良かった。」「何もしなくてもいい。」と言っている人が増えており、「地域の行事を止めてしまおう。」という話も出ている。止めるのは簡単だが、復活にはものすごいエネルギーが必要となる。あらゆるものが無くなり、繋がりが消えていくことを懸念している。

逆に良い点としては、ICTを活用すれば、会議ができることを初めて知った。学区でもICTを活用できないか検討している。

委員 コロナ禍で地域の様々なイベントが中止となっている。しかし、祇園祭りも元の起源は疫病退散だった。色々な工夫によって問題を解決する過程で、また新しい文化が生まれるのではないかと期待している。Facebook等を見ていると、「ここにこんなものがあります。」といったつながりがICT等の活用によって生まれている。今後の社会の成熟に期待をしたい。

委員 新型コロナウイルス感染症によって感じたことは、経済に関心が行き過ぎていること。人間の進み方について、少し休憩しても良いのではと思っている。

日本のように、医療や保険が充実している国は世界にないと思っていたが、新型コロナウイルス感染症によって、国内でも1,000人の方がお亡くなりになられている。これだけの被害をもたらしている病気について、国を支える人たちは、もう少し考えてほしい。

2点目として、先日テレビで京都における子どもの虐待が年間2,000件あると言っていた。表に出てこない数を考えると、実態はもっと多いと思う。少子化が進む中でこうした問題が生じていることについて、問題意識を持っている。

委員 最近では、どこの路地からも子どもの声が聞こえてこない。外に出ることができない小さい子どもたちはどうしているのかと心配している。これが家庭内の虐待等につながったりするのかと心配している。

地域では、運動会や地藏盆が中止になる中で、どうやってみんなと繋がったら良いのか。

特に、障害がある人は、この状況をどう受け止めているのか心配している。

(2) **資料3** 方針1, 2, 3について, 加筆・修正が必要な項目等について

委員 コロナ禍で多くの人の日常生活に影響が出ている。

特に、コミュニケーションの場が減っており、顔を見て話す、笑い合う場がないことで、心の底を吐き出す場がなくなっていると感じている。

方針2の取組2「一人親家庭等へのケアができるまちづくり」についてだが、仕事でリモートを活用している人は、ITの活用に拒否感がないと思うので、リモートの方が、逆につながりやすくなっている可能性がある。

高齢者向けのスマホ教室は、希望される方が多いと思うので、積極的に取り組んでほしい。

「子どもまつり」の中止は残念に思っている。集わなくてもできる方法や、小規模でも予約制でも良いので、何かできないか。一度止めると復活させるのが非常に難しいと感じている。

委員 新型コロナウイルス感染症は、開放的な空間の重要性を再認識するきっかけとなった。そういう空間を持つ施設等との連携が重要ではないか。

委員 親が子どもを虐待するといったことは、自分自身にとって理解しがたい問題である。虐待に至る原因がわからない。

地域の行事が中止となっているが、個人的には、今年は色々な行事がなくなってもいいと思っている。みんなが地域のことを改めて考える良い機会ではないか。来年は、オリンピックや区民運動会があつて良かったと言える年にしたい。今年はそのための一年だと思っている。

委員 コロナ禍であり、なかなか難しいが、コロナを前向きに受け止めていきたいと思う。

リーディングプロジェクトにある「ソリデール事業」についてだが、高齢者にとって、近くに誰かがいることで、日々の暮らしや生き方が変わってくると思う。

自粛等によるストレスが、虐待をはじめとする様々な問題を生むのだと思う。子どもたちの心が内に塞ぐことを防ぐ取組が必要であると感じている。

委員 まちづくりに大切な視点は居場所づくりだと思っている。

外国人や障害者も含めて、心地が良い、落ち着ける場所が必要である。そういう視点で考えると、誰もが自由に使える公園は大切な居場所だと思うので、上手に活用できないか。

高齢者にとっての居場所は、誰かの役に立てることだと思う。人の役に立つことは、高齢者の生きがいにつながると感じている。

委員 近年、共働き世帯が増加している状況もあり、なかなか難しいことは承知しているが、個人的には、子どもが小学校を卒業するまでは、子どもが家に帰ると「おかえり」と声を掛けてあげてほしい。子どもを守るのは家族の大切な役割だと思う。

委員 キーワードは、「見えない」と「見える」だと思う。孤立した状態が見えていないことが問題になっている。また、地域行事等が消えてしまうのではないかと見えてなくなることへの心配もあると思う。

孤立にしても、行事の継承にしても、見えなくなってきたことが問題になっている。喜びや怒りをお互いぶつけ合うことで「見える」ようにすることができていないことが様々な問題につながっている。

一方で、ICTの活用は、そうした「見えないもの」をつないで、「見える」ようにすることができる可能性を持っている。高齢者でもICTの活用で情報の共有が可能になることに気づいた。

居場所や出番等についても、見える化し、楽しさや悲しみを共有できる。それがつながりを作っていく。以前は、隣近所が子どもを叱ってくれたのは、お互いが見える関係にあったから。お互いが見えなくなると突然お隣の人に子どもが叱られると関係がこじれてしまう。関係性を作っておく、

お互いが心地よく見える。あるいは見せる関係ができるならば、つながることで知恵やノウハウ、子どもたちの育むことも可能になると思う。見えないものを見るようにすることが大事である。

議長 新型コロナウイルス感染症の下で、上京の暮らし方が大きな変化を強いられている。

本日の会議では、「もうダメ。」「やってはダメ。」「やめよう。」といった否定的な言葉もあった一方で、それを乗り越えようといった言葉もたくさん出たことに、希望や期待を持ちたい。

「はぐくみ・継承」部会での議論に当たっては、否定的な言葉を乗り越えて、これからの上京区の地域のつながりや生きがいをどのように創っていくかが大事なポイントである。

本日の議論の中でもいくつか期待を持ってそうな点として、1点目は、子どもから高齢者、外国人及び障害者をはじめとする様々な立場の人たちがこの地域の主役になっていく。そういう人たちを活かす地域になる必要があるということ。

2点目は、みんなが活動できる場や居場所がたくさん必要であるということ。

そういう場をみんなと一緒に創るための地域の力が必要である。そうした取組が、一人親家庭や高齢者の単身世帯であっても、地域でのお互いの関わりの中で豊かに暮らしていけることにつながるのではないかと感じた。

3点目は、それぞれの希望に合わせて暮らしていける地域を一緒に創っていくことで、お互いの理解や、支え合いの社会ができていくということ。

上京区は、それぞれの希望を叶えていくだけの十分な地域の資源を持っている。それは、歴史、伝統及び文化の中で育まれてきたもの、現に活動している地域や団体、形としてある町家、社寺など様々である。こうした資源は、それぞれの未来の希望を叶える財産になりそうだと感じた。

本部会では、地域の未来につながるまちづくりや継承等についての提案をしていきたい。

以上